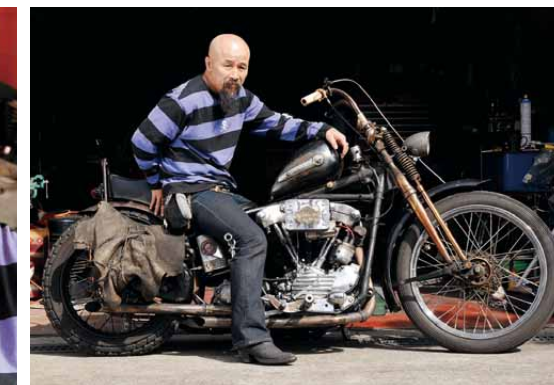




文：植田一礼 写真：金沢文春 取材協力：スカルダグリー



立石秀文
52歳。'46年式EL所有。
バイカー御用達のクール
なオリジナルグッズやア
クセサリー、旧車用パ
ーツで根強い人気のある
Webショップ「スカルダ
グリー」(http://www.sk
ulld.com/)を展開。最
近ではオリジナルのリジ
ッドフレーム用Zeeシー
トを発売した。中野にあ
る「Bar Enshield(http://
bar-enshield.jugem.jp)」
も経営。ガレージでナッ
クルヘッドと向き合いな
がら日々を過ごしている。



ディアスキンのバッグがあったから。

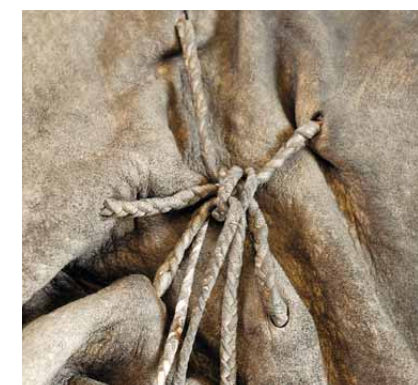
OWNER / HIDEFUMI TATEISHI



ガレージの扉が開かれ、内部へ鋭く差し込
む日光が照らすのは、63年前に製造されたナ
ツクルヘッド。そのふてぶてしいまでの神々
しさは、数多のガソリンとオイル、タイヤを
消費しながら、走ることで醸成されてきたも
の。すなわち壊れても修理を重ねることで蘇
り、今も路上にあるマシンが発する特別なオ
ーラである。
オーナーがこのELを手に入れたのは、80
年代の終わり。平成という年号に変わる少し
前のことだった。当時は他に乗っている人な
ど皆無かった。

「全然実
用じゃない
し、乗ってる人もいな
かった。あの頃ナツクルを普
通に使えると思ってた人はい
なかった」
自分でさえここまで乗ることが
できるとは想像していなかったとい
う。そして20年以上を共に過ごしてきたナツク
ルヘッドには、いくつものバッグが取り付け
られてきた。その中で一番良かったと今でも
思っているのは、バイク用に作られたもので
はない郵便局の集配袋だった。
「ポストの中に、郵便物を一緒にたに入れる
ズタ袋があるの。いろんなサイズがあるん
だけど、それは長く使ってたなあ。前はサドル
シートだったから、そこにひょいとひっかけ
て、すごく楽で。それこそバイクにつけて

たから汚いんだけど、アメリカに行くのもそ
の袋で行ってたから。あれが一番良かったん
だけど……」
その後、営んでいたバーの倉庫にあったと
いう現在の鹿革シヨルダーバッグを見つけ、
バイク用のサドルバッグとして使うようにな
った。
「このバッグはまだ4、5年くらいで、長く
は使っていない。その前につけていたバッグを
盗まれたり、落としたりなんかして。たま
たま見つけたもんだから、これいいかもしれ
ないと思って。バイクにつけたときは真っ白
だった(笑)。雨が降ったりしても中が
濡れないからいい。前はいつもコンピ
ューターを持って歩いたから、それ
用にバッグが欲しくてね」
もともとは厚みのある白い鹿革で
製作されたシヨルダーバッグなのだ
が、出回りはまったく不明のこ
と。サイズは大きめで、
完成度からしてもそれ
は決して安価で買える
ものではない。まとも
なものに入れようす
るならば、安くても10
人の福次郎先生に登場
願わなければならな
う逸品だ。
そんなバッグを惜しげもなく
バイクに取りつけて走れば、革が排気
ガスや水分、油分などを吸収してあつ
という間に汚れていくことは明白。ディ
アスキンに防水性があることは周知の事実だ
が、このバッグは染み込んだオイルなどで
さらに輪をかけてウオータープルーフ仕様
になっている模様。
そんなことは歯牙にもかけず使い倒してい
るのを見ると、このシヨルダーバッグはも
はやバイクの一部と化していて違和感を感じ
ないことに気付く。これも冒険でも述べた、数
10年単位でオン・ザ・ロードなマシンから匂
い立つような独特の空気を構成する要素な
のだと。
オーナーの愛情と献身を受けながら、ナツ
クルヘッドは21世紀の今も走り続けている。
そして、エンジン後方右側に馴染んだディ
アスキンバッグも、朽ち果てるまで自分の使
命をまっとうしようとするだろう。別の新し
いバッグに取って代わられる、その時が来る
まで……。



バッグのフタを開かないようにしているのは鹿皮を寄り
合わせた毛。横のヒモを束ねるように長いヒモを巻き
締めてやればロックされる。



シヨルダーバッグの肩ひも部分を後から加工し、フレームとシシーバー
を使って簡単に取り付けられるようになっている。



普段は基本的に空の状態。買ったものなどを運ぶ程度。バッグ
の底は内側にサドルレザーを縫いつけることで補強されている。